

■ 転換期のがん診療へ漢方で切りこむ

がんの標準治療を完遂するための医療用漢方エキス製剤の役割

元雄 良治（金沢医科大学名誉教授／

医療法人社団愛康会 小松ソフィア病院 腫瘍内科・漢方内科）

がん医療では、治療とサポーターケアは車の両輪であり、漢方の作用機序や臨床的エビデンスが蓄積されてきた。医療用漢方製剤を活用して、将来的には副作用対策だけでなく、栄養改善や就労・生きがい支援にまでつなげたい。

生薬の多成分がマルチに作用し効果を発揮する漢方薬

～基礎研究から得られたエビデンスを臨床に活かす

上園 保仁（東京慈恵会医科大学疼痛制御研究講座）

近年、漢方薬ががん治療の副作用改善に奏功することが知られ、漢方薬に含まれる多様な成分が生体のマルチターゲットに作用し効果を発揮することが明らかになってきた。これまでの経験知に科学的根拠を加味し最良の処方選択を通しがん患者のQOL向上に貢献したい。

がん患者の漢方診療

有馬 俊裕（新水前寺クリニック）

がんの漢方治療の目的は、患者のもつ自然治癒力を最大限に発揮させ、天寿を全うできるようにすることにある。そのためには、患者の病状や体調に合わせて、漢方薬の組み合わせを工夫したり、処方内容の調整を行っていくなど、より繊細な対応が必要となる。

がんに対する中西医結合治療経験

清水 雅行（医療法人社団宏洋会 清水内科外科医院）

当院では中医学的湯液治療を主としたがんに対する中西医結合治療を行っているが、西洋医学的治療のみでは得られなかった治療効果が得られている。自験例をもとにがん治療における中医治療の有用性について検討した。